

ガラテヤの信徒への手紙 2 章 1～10 節

2019 年 10 月 17 日

古本 靖久

1、聖歌 300 番 「主に招かれ 民のため」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 343 ページ）

4、今日の内容

これまでの箇所ではパウロは、自分が神さまから召された使徒であり、自分が伝えている福音は神さまから啓示を受けたものだとして強調してきました。

今日の箇所では、パウロたちがエルサレムでおこなった会議について言及します。「エルサレム使徒会議」と呼ばれるこの会議は、このようなものでした。

導入	1 : 1～5	挨拶
	1 : 6～9	異なる福音
福音の啓示	1 : 10～12	神から示された福音
	1 : 13～24	啓示の前後
	2 : 1～10	エルサレム使徒会議
	2 : 11～14	ペトロ批判
	2 : 15～21	信仰による義

<エルサレム使徒会議>

異邦人を教会に受け入れるための条件をめぐってエルサレムで開かれた使徒たちの協議のことで、使徒言行録 15 章に記されている。使徒言行録 10 章などから見て、異邦人宣教がそれ以前になされていなかったわけではないが、使徒会議における使徒たちの合意により、異邦人信徒は割礼の義務から解放されることとなった。その結果として、異邦人信徒の入信が容易にされたことから、キリスト教がエルサレム中心の原始教会から、異邦人およびユダヤ人から成る世界教会へと発展する分岐点となった。

「聖書学用語辞典（日本キリスト教団出版局）より」

パウロはガラテヤの信徒に、この会議の様子を報告します。会議は紀元 49 年頃に開催されたと考えられています。ユダヤ人キリスト者と非ユダヤ人キリスト者との間の問題について、公式な見解が与えられました。

パウロはその報告をきちんと書いてから、福音について語る必要を感じていたようです。今日はその報告を見ていきたいと思います。

5、節ごとに

◆エルサレム使徒会議

2:1 その後十四年たってから、わたしはバルナバと一緒にエルサレムに再び上りました。その際、テトスも連れて行きました。

パウロはダマスコで啓示体験を受けました（紀元 33 年）。復活のイエス様に会い、それまでの生き方が 180 度変えられた経験です。それから 3 年後（37 年）に一度エルサレムを訪問し、15 日間滞在します。

それからパウロは 2 度の伝道旅行に出かけ、異邦人の住む土地で多くの教会（共同体）を作っていきます。ガラテヤもその一つでした。そして一度目の訪問から 14 年後の 51 年、パウロはバルナバ、テトスと共に、再びエルサレムに行きます。

バルナバはキプロス出身のギリシア語を話すユダヤ人であり、エルサレム教会に対して経済的に多大な貢献をしていました。彼はヘブライ語とギリシア語を話すユダヤ人キリスト者の間を取り持ち、また回心したパウロをエルサレム教会の使徒に引き合わせました。

パウロとバルナバは、異邦人宣教の中心人物でした。そしてテトスは、テモテやシルワノと並ぶパウロの同労者でした。

2:2 エルサレムに（わたしが）上ったのは、啓示によるものでした（従って）。わたしは、自分が異邦人に宣べ伝えている福音について、人々に、とりわけ、おもだつた（認められている）人たちには個人的に話して、（提示した。）自分は無駄に走っているのではないか、あるいは走ったのではないかと意見を求めま（確認）した。

パウロはエルサレム訪問を、「啓示に従った」ものだといいます。つまり神さまの導きによってなされたものだと言うのです。パウロの目的は、自分が異邦人に宣べ伝えている福音を提示することでした。

彼がエルサレムに行って提示する相手、それはそこにいる人々であり、また人々に認められている人たちでした。そこにいる人々とはエルサレム教会の信徒を指し、人々に認められている人とは、使徒として教会の中心的立場を担っていた人たちのことでしょう。9 節に出てくるヤコブ、ケファ、ヨハネのことだと思われます。

パウロは自分が無駄に走っているのではないと確認します。新共同訳聖書の訳では、「～ではないかと意見を求めた」となっており、パウロは半信半疑だったようにもとれますが、そうではなく「神さまの権威によってやはり正当化されていることを確認した」というニュアンスの方が強いようです。

2:3 しかし、わたしと同行した（一緒にいた）テトスでさえ、ギリシア人であったのに、割礼を受けることを強制（強要）されませんでした。

「しかし」と書かれている語は、強い逆接です。これは「確認」に対する逆接ではなく、「自分の福音の提示」に対する逆接です。パウロは、自分が異邦人に対しておこなってきた福音宣教を伝えました。当然そこには、割礼を強要しない姿勢も伝えただけです。

エルサレムのキリスト者が律法の遵守にこだわるのであれば、ギリシア人であるテトスに対し、割礼を受けるように強要したはずですが、テトスにエルサレムへの同行を求めたのはパウロでした。パウロはあえてテトスを連れて行くことで、議論を吹っ掛けようとしたようにも思えます。

2:4 潜り込んで来た偽の兄弟たちがいたのに（にもかかわらず）、強制（強要）されなかったのです。彼らは、わたしたちを奴隷にしようとして、わたしたちがキリスト・イエスによって得ている（の内に持っている）自由を付けねらい（監視しよう）、こっそり入り込んで来たのです。

当時の教会は、ユダヤ教の一つの教派であると考えられていました。そのためユダヤ人のアイデンティティである割礼を重んじていきます。その傾向は70年のエルサレム神殿崩壊で弱まりますが、150年頃まで続いていたようです。

このときも面と向かって反対はしないが、隙を狙って反撃しようとする人たちがいました。偽兄弟たちです。偽というのはあくまでもパウロの評価で、エルサレム教会で「兄弟」として認められている人たちでした。

彼らはパウロの福音に特徴的な「自由」に疑念を抱き、監視する目的で入り込んでいました。そして自分たちの福音に属させようとし、パウロはそのことを「奴隷」と表現します。当時ローマ帝国では人口の15%が奴隷だったと言われます。奴隷のイメージは、すぐに人々に伝わったことでしょう。

2:5 福音の真理が、あなたがたのもとにいつもとどまっているよう（留まるため）に、わたしたちは、片とき（さえ）もそのような者たちに屈服して譲歩するようなことはしませんでした。

しかしパウロは屈服しませんでした。割礼の圧力も、そして異邦人キリスト者をユダヤ人の中に組み入れようとする力をも、パウロははねのけました。それは何よりも、福音の真理がガラテヤの信徒のもとに留まるためです。「留まる」とは「残る」という言葉を強調したもので、継続的あるいは恒久的にそのようになることを強調します。

2:6 おもだった（何者かであると認められている）人たちからも強制されませんでした。——この人たちがそもそもどんな人であったにせよ（か）、それは、わたしにはどうでもよいことです。神は人を分け隔てなさい（外見で判断され）ません。——実際、そのおもだった（認められている）人たちは、わたしにどんな義務も負わせ（何も付け加え）ませんでした。

「何者かであると認められている人たち」と、2節の「人々に、とりわけ認められている人たち」とは同じ人たちのことでしょう。つまりエルサレムの使徒たちのことです。パウロは1章で、自分は神さまに使徒として選ばれたことを強調しました。それに対しここに出てくるのは、「人々から」認められた人たちです。

エルサレムの人たちは、使徒たちがそもそもどんな人であったかを問題にします。たとえば9節に書かれている三人と同じ人たちであれば、ケファ（ペトロ）とヨハネはイエス様の活動に直接参加した弟子、ヤコブはイエス様の兄弟です。そして彼らはおそらく、教会が出来たころから指導的な立場にいたことでしょう。

しかしパウロは言います。神さまはそんなことで依怙最負されないと。神さまは外的な要素で人を重んじたり、排除したりされないのです。

2:7 それどころか、彼らは、（ちょうど）ペトロには割礼（者）を受けた人々に対する福音が任されたように、わたしには（無）割礼（者）を受けていない人々に対する福音が任されていることを知り（認め）ました。

結局エルサレムの使徒たちは、パウロの異邦人宣教に対して何も付け加えることはしませんでした。ただ使徒言行録15章によると、次のことは付け加えられたようです。

聖霊とわたしたちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。すなわち、偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けることです。以上を慎めばよいのです。健康を祈ります。（使徒15章28～29節）

ルカによる福音書と使徒言行録は、エルサレムを中心として描かれているとされます。したがって上記の箇所は、エルサレム教会に配慮して付け加えられたのかもしれませんが。わたしたちが手紙から知るパウロは、「何も負う必要がない」ことを強調しているからです。

ここでパウロは、ペトロには割礼者への、そして自分には無割礼者への福音宣教が任されていることが認められたことを伝えます。「任された」という動詞は「神的受動態」という形を取っており、任せたのは神さまです。神さまによってパウロは異邦人伝道を任され、エルサレムの教会もそのことに同意したのです。

2:8 (なぜなら) 割礼(者の)を受けた人々に対する使徒(職)としての任務のためにペトロに働きかけた方は、異邦人に対する使徒(職)としての任務のためにわたしにも働きかけられたゆ(から)です。

パウロは繰り返します。彼らの使徒職のために働きかけるのは、神さまです。ここで注目したいのは、パウロは7節でも8節でも自分のことだけではなくペトロのことにも言及しているという点です。

この手紙の主旨からいくと、パウロは自分の正当性だけを書き続けていけばよいはずですが。しかし彼は、ペトロもまた神さまによって召されたのだと言うのです。

パウロはペトロの権威に、何も疑念を抱いてはいませんでした。ただ単に、神さまから命じられた役割が違っただけなのです。エルサレムを中心としたユダヤ人に対して福音を伝えるに行くのか、それとも世界に向かうのか。その違いだけです。

2:9 また(そして)、彼らはわたしに与えられた恵みを認め(知ると)、(柱と認められている)ヤコブとケファとヨハネ、つまり柱と目されるおもだった人たちは、わたしとバルナバに(対して)一致のしるしとして(交わりの)右手を差し出しました。それで(は)、わたしたちは(が)異邦人へ、彼らは(が)割礼(者へ)を受けた人々のところに行くことになったゆ(ため)です。

パウロは異邦人宣教のことを、「わたしに与えられた恵み」と表現します。以前のパウロを知る人からすると、これは驚くべきことだったでしょう。パウロはユダヤ教の教えを厳格に守るファリサイ派として生き、キリストの教えを否定し、教会を破壊していきました。

ところが神さまからの啓示によって、パウロの生き方は変えられ、異邦人に福音を伝えることを恵みと感じられるようになったのです。本当であれば、自分と同じ考え方を持つユダヤ人に宣教した方が楽かもしれません。そこにはわたしたち人間には理解し難い神さまの大きいなご計画があったのです。

エルサレムの使徒たちは、パウロの異邦人宣教を認めました。そして交わりの右手を差し出します。右手は力や敬意が示される場という意味を持ち、右手を差し出す行為は「信頼、友情、同盟」の証しとなります。つまりパウロとバルナバ、そしてエルサレムの使徒たちの話し合いによって、友好的な合意が得られたのです。

ちなみにここに出てくるヨハネは、漁師をしていたゼベダイの子です彼の兄弟のヤコブは44年ごろにすでに処刑されています。またテトスは、握手の輪には入っていません。テトスが異邦人だから、エルサレムの使徒たちは握手を拒絶したのでしょうか。

2:10 ただ（それは）、わたしたちが貧しい人たちのことを忘れないようにとのことでしたが（覚えるためだが）、これは、ちょうど（まさに）わたしも心がけて（努めて）きた点です。

エルサレム使徒会議の場で、もう一点合意した事項がありました。それは「貧しい人のことを覚える」ということです。「貧しい人に配慮しなさい」という戒めは、ユダヤ教の中に多く見られます。申命記 24 章 10～22 節や、ルツ記の「落穂拾い」の元になったレビ記の律法の考え方は、初期の教会にも受け継がれていきます。またイエス様に倣う教会としても、貧しい人と共に歩む姿勢は、とても大切なことでした。

しかし、貧しい人に対する施しに慣れていない異邦人教会もあったようです。そこであえて「覚えておく」ことも共通認識の一つとして掲げたのでしょうか。しかしパウロは、「わたしも努めてきた」と、以前からおこなってきたことを告げます。

<今日の箇所から>

今日の箇所で一番心に残ったのは、パウロはペトロを認め、お互い別々の場所で宣教をしようとしていたことです。わたしたちはともすれば、「あれか、これか」、「これが正しい、あれは間違っている」と簡単に結論を出し、相手を否定します。しかし少なくともこのときは、パウロはそれぞれの立場を尊重しているようです。

神さまはわたしたち一人一人に違った賜物を与え、またそれぞれに役割を任せてくださいます。コリントの信徒への手紙一 12 章 14～18 節に、パウロは次のように書いています。

体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。

自分たちが信じていたものが否定される。ないがしろにされる。そのようにエルサレムの人たちは思ったのかもしれませんが、だからこそパウロの強い思いがなければ、福音はわたしたちの元には届いていなかったのかもしれないのです。

今回の学びは、これで終わります。次回は 11 月 21 日(木)10 時 30 分～で、「ペトロ批判、信仰による義（ガラテヤ 2：11～21）」について学んでいきたいと思ひます。